

 「良書ご案内」

書籍名	リーチ先生	著者名	原田 マハ
出版社名	集英社文庫	発行年月	2019年 6月

JRで一駅の立地に大山崎山荘美術館がある。バーナード・リーチ、浜田庄司、河井寛次郎などの作品が常設展示されており、散歩の延長で時々訪れている。

本書を読み、彼らの交友関係や歴史的背景の理解も進み、より親密感を持つことができた。

本書はリーチを中心に、彼が出会った人たちの熱情と生き様を描いている。

1909年(明治42年)リーチが来日する。22歳であった。

ロンドン留学中の高村光太郎と出会い、「日本とイギリスの架け橋になる」と決意する。

日本語は話せない、文化も習慣も異なる、右も左もわからない土地で、向こう見ずとも思える大志を持ってやって来る。その年、リーチは柳宗悦(むねよし)と出会う。その後柳を通じて、白樺派の面々との交流が始まる。

リーチが大きな影響を受けた白樺派とは、1910年(明治43年)創刊の文学同人誌「白樺」を中心に起こった文芸思潮の1つである。

大正デモクラシーなど自由主義の空気を背景に人間の生命を高らかに謳い、理想主義、個人主義、人間肯定を志向し、それまでの自然主義にかわって1910年代の思想の中心となった。

武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎、里見弴、倉田百三など羨ましい出会いがあった。

白樺派が高く掲げる理想がある。「個性的であること。」「批判を怖れず自分に忠実であること。」「誰にも似ていないことにこそ、誇りを持つこと。」

1911年(明治44年)リーチは、陶芸という生涯をかけて進むべき道を見つける。

当時陶芸は書画とか油絵、彫刻と比べ、どうしても劣るといふか、芸術として格下のように考えられていた。リーチは、実用よりも美術的関心を優先させた純粹芸術としての陶芸に対して、実用的な日用陶器を作ることに価値を求めた。当然制作する作品は、日用品としての用を満たす器を追求することになる。

その後陶芸を通じて1914年(大正3年) 浜田庄司、河井寛次郎との出会いがある。

柳、浜田、河井により開始された民芸運動(1926年・大正15年)にリーチ、棟方志功、富本憲吉等が加わる。その運動は、「日常的な暮らしの中で使われてきた手仕事の日用品の中に『用の美』を見出し活用する。」「用と美が結ばれたものが工芸である。」を基本思想とするものであった。

原田は、本書において贅沢なくらいの歴史上の人物を自在に再現させ、明治から大正、昭和にかけての芸術家の熱気を伝えている。まさに「出会いこそ人生」そのものだ。

岩城

今年の大河ドラマはみなさんどのような印象を？私は毎週心待ちにしています。

編集後記
特に義経が活躍し平家を倒すあたりはどう描くか興味津々でした。脚本の三谷幸喜氏は「新選組!/2004年」と「真田丸/2016年」に続く3回目。ただ少し趣が違うのは北条政子や娘の大姫、北条義時の継母の牧の方など女性陣への目配りというか視点がふんだんに盛り込まれている点でしょうか。そこがいいスパイスになっていると感じます。題名の「鎌倉殿の13人」のうち9人は武士、4人は文官。最終回は12/11か12/18。まだ4割ほどの進捗状況。鎌倉に行きたくするのは私だけでしょうか？

発行所：株式会社ライフデザイン研究所

所在地：〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-4-87サビ`ル2F

Tel 06-4708-6844 Fax 06-4708-7067

編集人 伊藤

